三島由紀夫「自動車」論
―モノと身体の交換の行方―

中元　さおり

はじめに

戦後の大衆消費社会の進展は、クルマが大衆化していく動向に顕著にあらわれている。占領期は国産車の空白期間であったが、昭和三十年代に入ってから自動車の開発、生産が国を挙げての産業政策となり、活発化していく。このような流れを大きな駆動力として、日本の経済は、復興期から高度成長期へと大きく進展していった。まさに、クルマは高度成長時代を象徴する記号となり、昭和三十七年には「マイカー」という言葉が流行語となる。そして、クルマは移動の個人化、自由化やレジャーを享受できるようなよりよい生活を保証するものとして、大衆の欲望を刺激していった。昭和三十九年の東京オリンピックを前に、昭和三十八年には名神高速道路や首都高速一号線、四号線が開通するなど、道路整備が急ピッチで進められていくなか、これまでにないスピード時代が到来した。そして、身近にマイカーが氾濫し始めると、クルマは所有の欲望の対象としてだけでなく、「走る兇器」としても語られることとなる。[1]自動車事故の急激な増加とともに、クルマの危険性が問題視され、クルマが人間に死をもたらす道具でもあることが認識されるようになった。また、駐車場不足や渋滞の問題も話題となり、急速にクルマが氾濫し始めた社会への不安が取り沙汰されるようになる。クルマが表象するよりよい生のための道具という利点だけでなく、クルマの負の側面も語られるようになったのである。

このような時代においては、自ずとクルマの持つ記号性は大きくなるだろう。昭和三十八年一月に発表された三島由紀夫の短編小説「自動車」(『オール讀物』)には、クルマに向けられた大衆の欲望のありようが写し取られている。中年の男九鬼は免許試験場で幼さがまだ残る少女芳子と出会う。試験場での時間つぶしの相手として九鬼は芳子と接触するが、免許を取得した後の芳子は熱狂的なスポーツカーマニアとしての側面をみせていく。クルマが象徴するスピードへの欲望をあらわにした芳子は、自らの身体と引き換えにクルマを手に入れようとし、九鬼は芳子の誘惑にとりこまれていく。ここには、モノと身体の交換という契約の成立が描かれているのだ。そしてスピードを象徴する記号としてのクルマを所有することによって、芳子はスピードそのものを身体化しようとしていくのである。

クルマが次第に大衆化していくなかで、細かな差異が消費者の選択の基準となっていった。昭和三十年代後半から車種や機能性などが多様化

し、差異が際立ってきた。そして「自動車」においても、志向され所有されるクルマの差異は、それを選択し、所有する個人の内面をあらわしているのである。

「自動車」は、三島文学の数ある短編のうちの一つにすぎず、これまで言及されることはほとんどなかった。しかし、このテクストには、クルマの表象をたよりに、戦後における世代間差や時代の差が対比されているだけでなく、モノと消費をめぐる問題が内包されており、戦後の大衆社会をみていくうえで重要な視点を提供してくれるように思える。そこで本稿では、この小説を支える対立概念としての中年と若者の関係を整理し、クルマの記号性がいかに表象されているかを考察する。また、一九六〇年代におこったモータリゼーション化という現象をテクストがどのように取り入れているのかを押さえたうえで、復興期としての戦後と高度成長期のポスト戦後がどのように描かれているかを、モノと身体の関係性を手がかりに考えていくことにしたい。さらに、一般においては一九八〇年代に顕著になった高度消費社会への予感が、昭和三十八年に書かれたこのテクストにおいてすでに先取りされていることも明らかにしていく。

一、

「自動車」には、中年／若者という世代差が散見される。それは、まず九鬼の身なりの描写が細かに語られていることからもわかる。免許試験場に溢れかえっている夏シャツ一枚という軽装の若者たちのなかで、九鬼は蝶ネクタイに金縁の眼鏡、パナマ帽、サマー・ウーステッドの上着にコールマン髭という前時代的な格好である。このような場で異彩を放つ自己の存在について九鬼は充分自覚的であり、むしろ若者たちと自分の間にある明確な差異を受け入れたうえで、今日だけは若者たちと「同一の条件で扱はれることの面白さ」を楽しもうとしており、非日常的なこの空間に身を委ねていくのである。それは、若い頃にもっていた「水や空気のやうに豊富にあつた時間の感覚」を復活させる試みでもある。「自動車」というテクストを支えているのは、時間の感覚における中年／若者という二項対立である。

無為に時間をやり過ごす若者たちが占める試験場の空気を九鬼は「ゆつくり」したものとして感じているのだが、それは九鬼の日常における速度がこの場のものと大きく異なっていることを意味する。九鬼はこの時間の流れを「大そう新鮮に感じ」、「何もかもゆつくりとやらう」ときめる。九鬼は仕事に追われた忙しない日常を送っている。それは、戦後十七、八年のうちに「商用で十二回アメリカへ行き、四回世界一周をした」ような人間であることからもわかる。商用でという条件があるものの、海外渡航が厳しく制限されていた時代にこれだけの移動が可能であったのは、彼が特権的な階級に属していることをあらわしているだろう。さらに、移動の自由だけでなく、戦後十七、八年の間に膨大な距離の移動をこなす速度を身につけていることは重要である。富こそが速度を可能にする手段であり、「速度は権力そのもの」[2]であると語るヴィリリオの言葉をみるまでもなく、占領期から復興期にかけての戦後の時代において、これほどまでの移動が可能であった九鬼は、ある程度の富や権力を享受してきた人物であるといえるだろう。クルマをはるかに上回る速度の乗り物による移動が可能であった九鬼にとっては、自らクルマ

を運転するという選択肢はとくに必要なものではなかったのである。もともと短時間で長距離の移動が可能な九鬼にとって、クルマとはスピードや移動のためのツールではない。むしろ、ゆるやかな速度の乗り物であり、「ゆつくりと」楽しむものとしてある。それは、忙しない日常から離れるための道具であったかもしれない。

免許試験場を支配する「ゆつくり」という時間の感覚は、若者たちがもてあました宙ぶらりんの時間であり、九鬼はこの感覚に身を沿わせようとしていく。九鬼は若者たちとの差異を自覚したうえで、今日だけはこの境界線を踏み越えてみようとするのだ。それは、忙しない日々が繰り返される確定した日常から離れ、何が起こるかわからないような不確実性に身を投じる試みでもある。

何もかもゆつくりやらうと九鬼は思つた。一本の煙草を喫むにも、シガレット・ケースをゆつくりとあけ、ゆつくりと一本とりだし、ゆつくりと口にくはえ、ゆつくりとライターをさぐり……。

しかし目前の若者たちが、これからの二時間へ立ち向かう態度は、九鬼とはまるでちがつてゐた。彼らは待たされることには馴れてゐたし、第一、ふだんから暇がありすぎた。彼らは細身のズボンの姿で、ひどく宙ぶらりんで、誰からも大して熱狂的にまたれてはゐなかつた。

そして潮風は歩廊へ来てふくらんで、お互いに不機嫌な、蔑みに似た眼差を投げ合つてゐる彼らの足もとを吹き抜けた。

かういふ連中と同一の条件で扱はれることの面白さが、四十七歳の九鬼の心をくすぐり、自分を若いと想像することはもうできなくても、せめてあのころ、水や日光や空気のやうに豊富にあつた時間の感覚を、もう一度心の裡によみがへらせたいと思つた。

ここでは、時間に縛られた九鬼と、使いきれないほどの豊富な時間を持て余す若者の対比がなされている。九鬼にとってこの空間での時間は、突如与えられた空隙の時間であり、余剰の時間である。「ゆつくり」という言葉を意識的に反復することによって、かつての若かりし日を思い出しながら、若者固有のペースへと変調していく。このような方法で、若者たちと時間を共有することを試みるのだが、その試みを支えているのは、何が起こるか分からない不確実性にひかれる九鬼の欲望である。

さらに九鬼はともに過ごす相手として芳子を選びとる。九鬼は芳子の「体つきや顔つきにいちじるしく未成なところ」があるのを感じる一方で、「葦の穂先を抜いた白い芯のやうな水つぽいなまなましさ」も見出す。芳子が教則本に気をとられているのをいいことに、彼女を仔細に眺めている。九鬼の視線は芳子の未成熟さをとらえ、「この子なら危険はあるまい」と値踏みをしながらも、彼女の口の動きに視線を集中させる。

折角退屈しのぎに連れて来たのに、九鬼は一時間以上も、沈黙のお相手をさせられる羽目になつた。少女は教本に首をつつこんだきり、サンドウィッチも手探りで喰べる始末であつた。

その代り九鬼はゆつくりと少女を観察できた。サンドウィッチは、するすると指に挟まれ、列びのいい歯の前へ運ばれて、ちよつと軽く歯でしごかれるやうに見えると、サラダ菜の緑や桃いろのハムが、半月の形に千切れ、可愛らしい咀嚼に力をこめた頬とは無関係に、大きな目は自動車法規の条文に釘づけになり、ふくれたやうな形の唇がよく動いて、九鬼の心をそそつた。

ゆつくりと、ゆつくりと、と九鬼は思つてゐた。気取つたレエス

のカアテンの外には、日ざかりの夏の日がしんしんと落ちてゐた。

危険のない未成熟な少女として芳子を看做そうとしながらも、肉感的な唇の動きに性的な欲望が刺激されていく九鬼の視線は、自分の日常からの逸脱の試みから発せられたものである。そして、九鬼の一方的な視線は、彼が芳子にみようとするイメージを映し出すのみで、実体的な芳子像を結ぶことはない。さらに、芳子の側から視線を向けられることはなく、二人の視線は交錯しないのだ。このことは、二人の欲望の在処が大きく乖離していることの証左でもある。目前に迫った自動車免許取得という至上命題に向けて試験勉強に追い込みをかけている芳子の欲望は、言うまでもなく免許を手に入れ、クルマを獲得することに向けられていよう。したがってこの段階で、芳子の視線は九鬼に向かうこともなく、九鬼が抱いている思惑を理解することもない。視線が交わらないのと同じく、お互いの欲望は相手に共有されることはない。「ゆっくり」とした時間を過ごしているという共有体験は、九鬼の幻想にしかすぎないのだ。

しかし、試験を終え免許を取得した途端、芳子は変貌する。「彼女は子供のやうに跳ねまはり、人が変わつたやうにお喋り」になり、「興奮してほとんど咳き込むばかりになりながら、車の話をしつづけ」るのである。そして、九鬼は足を踏み入れた芳子の部屋の「終日こもつた熱気にまじる若い女の部屋の匂い」に戸惑う。芳子は未成熟な少女から若い女へと変貌するとともに、クルマに対して異常なまでの執着をみせていく。免許の試験という抑圧から解放されても、九鬼は芳子から眼差されることはない。芳子の視線は、今度は壁に貼りめぐらされた自動車のポスターに向けられていくからである。また、クルマの魅力を語る芳子の言葉すらも、九鬼に向けられたものではなく、クルマというモノに対する自己の欲望に向けられたもので、自閉的な言葉なのである。

「さあ！　いい子だから、大人しく着かへたら、自動車を買つてあげよう」

「ほんと?」

急に芳子が壁から向き直つた。その大きな濡れた目が、気味のわるいほど真剣な熱情を湛へてゐるので、九鬼はむしろ怖くなつて、自分のコールマン髭に指をやつた。

芳子の視線が九鬼に向けられるのは、クルマの所有という欲望の達成が約束されたときである。しかし、芳子の言葉が自閉的であったのと同じく、この「大きく濡れた目」もまた九鬼ではなく、クルマを所有したいという欲望に向けられたものである。このように剥き出しになった芳子の欲望を目の当たりにし、九鬼は時代遅れなコールマン髭を触り、本来の自分の領域へ戻ろうとしながらも、結局芳子の欲望のなかに取りこまれていくこととなるのだ。

九鬼にはこれが非現実的で、それでまた、ひどく自然な出来事のやうな気がした。芳子はいつのまにか両方の肩紐を外してゐた。そしてゆつくりと、九鬼の傍らに坐つた。

九鬼は仕方なしに、依然としてその頭の中には自動車だけが走りまはつてゐることのわかつてゐる娘の体へうしろから手をかけた。そして、尖らせてゐる唇をつくづく見た。

今朝、九鬼はこの唇に接吻したいと思つたのだつた。そして今もそれは、そこにちやんと在つた。豊富な、水のやうな、日光のやうな、自堕落な時間のはてに。

つかの間の空隙の時間を、若い頃のように「ゆつくりと」過ごし、共有し合うことを九鬼は目論んでいたが、剥き出しになった芳子のクルマとスピードへの欲望により、「何か面白いこと」「少しでも心をゆすぶるやうなこと」への期待は潰え、挫折していく。また、九鬼が芳子の上に見ようとしていた未成熟な少女性も、九鬼の幻想でしかなかったことが露呈する。これまで九鬼が主導権をにぎり、芳子との関係を進めているかのようだったが、免許の取得が決定してからは、突如主導権は欲望をあらわにした芳子に移動し、二人の関係性そのものが大きく変容し、クルマと身体の交換が成立したのである。

二、

「自動車」にはいくつか実際のクルマの名前が登場する。例えば、九鬼が所有しているのは六〇年型フォード・ファルコンであり、芳子が好むのはロータス・エリートやＭＧのＭＧＡ一六〇〇である。このようにクルマの嗜好性は彼らの存在自体を表象しており、九鬼と芳子のクルマの好みにおける差異は重要な意味をもっている。ボードリヤールが『消費社会の神話と構造』[3]で論じたように、消費社会では商品の選択という行為には、他者との差異を示す意味がある。消費者として膨大な商品のなかから選択的に選びとられたモノが、自分と他者の違いを知らしめる個性の表現へ向かうとすれば、まさに「自動車」の九鬼と芳子がみせるクルマの好みは、彼らの個性を物語るものとなる。そこで、「自動車」におけるクルマの記号性を九鬼と芳子の好みの差異に基づいて考えてみたい。

九鬼は六〇年型フォード・ファルコンを所有しているが、免許をまだ持たない彼にかわりに、このクルマは息子に使われている。事実上は、クルマの所有権は父から息子に移譲されているのである。

勢ひこんだこの言葉のおかげで、九鬼は自分の車は息子が運転してゐること、彼が運転を習ひはじめたのも息子に対抗するためであること、今日も今日とて息子は親爺の車で女の子を連れてどこかへ遠出をしてゐること、などの恥を言はずにすんだ。

自分が所有するクルマを、息子が独占的に使用していることを九鬼は、「恥」として受けとめている。したがって、彼の免許取得という行為には息子への対抗心だけでなく、父としての復権と、男としての復権の二つの意味が込められているといえるだろう。

まず、父としての復権についてみていく。「マイカー」ブームが到来したこの時代、クルマは家庭の消費財であった。昭和三十七年末の全国の自動車保有台数は二三三七万台余で、国民四・六人に一台の割合であった。[4]一家に一台が理想かつ一般的であったため、クルマを運転できる年齢に達した息子たちの多くは、父親の許可のもとクルマを借りレジャーに利用していたような状況だっただろう。つまり、クルマは家庭の消費財でありながら、その所有権は家長である父親にあったのだ。そのため、運転しない九鬼にとってはクルマにおける父親の象徴性が希薄に感じられ、息子が自分のクルマを乗り回していることを恥じているのである。九鬼家のクルマは所有者が父でありながら、主な利用者が息子であるという問題が生じていたが、このような事態を打開するために、九鬼はさして必要でもない免許を今更取得したのだといえるだろう。九鬼の免許取得は、息子からクルマを奪還し父性をより堅固なものへと再建す

るための手段であるといえる。

次に、男としての復権についてみたい。九鬼にとってクルマとは、男性性の象徴でもある。なぜなら、九鬼は異性との関係を促進させるための道具としての意味をクルマにみているからである。息子が女の子とのドライブを楽しんでいるのを横目で眺める九鬼の脳裡には、息子に象徴されているポスト戦後的風景に対して、戦中期に送った自身の青春時代が対置されているのではないだろうか。九鬼の青春時代は戦中期にあたるものと思われるが、その時代においては彼の息子が楽しんでいるような女の子とのドライブを実現させることは困難だっただろう。そのような青春時代の欠落を、免許の取得によって補填することが九鬼の目的なのである。そして、自身のノスタルジックな願望を実現させるための相手役として芳子が選ばれたのだ。「髪を昔風のお下げにして」あどけない表情を浮べた芳子は、まさに戦中期の青春時代を挽回しようとする九鬼のノスタルジックな願望の投影でもあるだろう。クルマというモノに対して異性との交渉が九鬼に強く意識されていることは、先にも引用した息子が女の子と出掛けるために父親のクルマを利用していることへの言及や、「第一、こんなすごい車に誰と一緒に乗るつもりだい？」という芳子への発言にもあらわれている。九鬼にとっては、芳子が一人でクルマに乗るということは特異な事態なのだ。九鬼は、異性と乗るためのモノとしての意味をクルマにみているのである。つまり九鬼にとってクルマとは、男性性を象徴するものであるとともに、彼の性的ファンタジーを支えるものでもあるのだ。またそれゆえに、九鬼は欠落した自身の青春時代を再現しようとしたにもかかわらず、若い女の肉体を買う中年男という関係のなかにとらえられてしまうこととなるのである。

また、九鬼が所有するクルマである六〇年型フォード・ファルコンはアメリカの大衆車の代名詞でもあり、戦後アメリカの象徴でもあることにも注意しておきたい。コンパクトカー元年と呼ばれる一九六〇年に登場したこのクルマは、大衆車の代名詞ともなった。もともと長距離の移動の自由を有しているほど特権的な階級にいる九鬼が、大衆車を選ぶのは少しそぐわない気もするが、重要なのはこのクルマが戦後アメリカの繁栄の象徴であることだろう。何度も海外に渡航した九鬼は、戦後の繁栄を享受してきた階級にある人物とみなすことができるわけだが、九鬼の現在の地位は占領期のアメリカとの関係において築かれたものであることが想像される。要するに、九鬼とは戦後アメリカの繁栄に寄り添い、日本の戦後の復興期に経済的な繁栄を享受してきた人物なのである。そして、九鬼のような存在はその身なりが物語っているように、戦後十八年を経た昭和三十八年には、もはや前時代的な戦中派の象徴として描出されている。戦時下で欠落した青春を、戦後の繁栄で埋め合わせようとする戦中派の姿が、一九六〇年代のモータリゼーションの動きに重ねられてもいるのだ。

三、

一方、芳子が好むクルマの持つ記号性は、九鬼のものとは大きく異なる。免許試験に合格した芳子は、とたんに九鬼を相手に熱狂的にクルマについて語りはじめる。それは、スピードへの熱狂でもある。芳子はスポーツカーの傑作として名高いロータス・エリートや、ＭＧのＭＧＡ一六〇〇ＭＫⅡといった欧州のスポーツカーを好んでいるが、これらのク

ルマはまさにスピードの象徴である。たんなる移動のための機械としてのクルマではなく、スピードを楽しむためのクルマといえるだろう。そのような芳子はクルマのデザインやスポーツ性を重視する。いかにスピードを体感し、クルマと一体感を得ることができるかが重要とされている。「車と私の間に第三者を入れたくないの」と語る芳子の言葉には、ただ純粋にスピードを感じるために、自己の身体とクルマを結びつけようとする意識があらわれている。芳子はスピードを体感するためにクルマと自己の身体が一体化することを望んでいるかのようである。

芳子のスポーツカーに寄せる偏愛ぶりは、フェティッシュな欲望をはらんでいる。クルマは芳子にとって欲望の対象そのものであり、ここに第三者が介在することはない。あれこれとスポーツカーの名前を挙げながら熱心にクルマへの愛を語る芳子に九鬼は「第一、こんなすごい車に誰と一緒に乗るつもりだい？」という言葉をかける場面では、九鬼と芳子にとってクルマが意味するものが大きくずれていることがあらわれている。九鬼にとってクルマとは、父親の象徴であり、父から息子へと移譲されるものである。またそれは男性性を象徴しており、息子の代では恋愛の小道具として利用される。一方芳子はクルマを、スピードを体感するための身体の延長機能のようにとらえており、そこに性的な欲望は存在しない。ハイスピードでクルマを操作する感覚は、万能感をドライバーにもたらすものであり、それは男性的な能力の増強につながる。(5)しかし芳子の欲望は、九鬼が抱いているようなクルマをめぐるジェンダー性では解釈しきれないようにも思える。芳子がクルマとの一体感を得ようとすることは、自己の身体とモノとの境界をあいまいにする行為なのである。

しかし、芳子はなぜこんなにもスピードへの欲望を募らせているのだろうか。クルマを移動の欲望を満たすための道具ではなく、速度という一点において解釈しようとする芳子にとって、スピードとは何を意味するのだろうか。「自動車」の語り手は、九鬼の視線とほぼ同一の位置にあり、芳子の内面が描写されることはない。九鬼が芳子の内面をとらえきれなかったのと同じく、テクストにあらわれる芳子は試験場でみせた幼い外見とクルマへの偏執的な欲望という分裂した状態で九鬼の目に映るのである。

しかし、ここにあらわれている分裂こそが芳子の存在を物語ってもいる。試験場での芳子には免許の取得という目標しか見えておらず、目の前の九鬼とディスコミュニケーションな状態にある。九鬼がとらえる芳子像も、自分の都合のいいように映し出されたものでしかないが、芳子が何者なのかをゆっくりと吟味しようとしている。それに比べ芳子は、免許の取得という関心事以外に目を向けることはなく、九鬼の存在すらもほとんど意味をもたないのだ。このような芳子の内面は、試験に集中しているかのように見えて、実はその他一切を排除するという一種の思考停止状態にあるのではないだろうか。試験場に溢れかえっていた若者たちと同じく、芳子もまた空虚な内面を抱えた人物として描かれているように思える。彼らの日常は、ただ無為な時間が有り余っているだけで、空虚な時間を持て余しており、そのような日常からの脱出の手段として、スピードを求めているのではないだろうか。そして速度は高まれば高まるほど、死の危険性が大きくなる。つまり、スピードへの欲望には、死の恐怖と近接した生の実感への飢餓感があるのだ。芳子は決して特殊な存在ではなく、緩慢な日常から束の間の脱出を試みようとする若者の

一人なのである。

四、

マイカーの普及とともに、クルマの「走る兇器」としての側面が取り沙汰され始めたことは先に言及した。高速で危険運転をする「神風タクシー」が問題となったのは昭和三十三年だが、昭和三十七年以降にマイカーが一般化すると、運転技術の未熟なドライバーの存在が顕在化し、「神風マイカー」という言葉も登場する。ドライバーの急増とともに、交通道徳の希薄さが新聞等で頻繁に取り上げられるようになる。また、自動車ショーに詰めかけた若者たちを「からだだけ発達したのが、素朴にスピードに酔い、素朴に解放され」ていると断罪したり（『朝日新聞』昭和三十六年十一月八日）、スピードに魅せられた若者たちを危惧するような言説が登場し始め、彼らの暴走行為が社会問題化していく。原宿にたむろし、スポーツカーを見せびらかせ、クルマのスピードを競い合う「原宿族」と呼ばれる若者たちは昭和四十一年からたびたび新聞や週刊誌で話題にのぼる。無軌道な若者とそれを取り締まろうとする大人たちとの対立は次第に激化していき、昭和四十一年十一月六日の『朝日新聞』には、「もうガマンできぬ――原宿族」との見出しで、原宿の町民が対策にのり出したことが報じられている。このような地元町会が主体となった取り締まり運動は、警察だけでなく、都議会や国会にも波及し、大きな社会問題へと発展していく。三島の短編小説「自動車」はこのような時代を背景としているのである。また、「原宿族」と呼ばれる若者の属性については、男の子は上流階級の息子が多く、女の子は平凡な中産階級の娘が多かったようである。(6) 三島の短編小説「自動車」でも、九鬼は芳子の外見から「中流の家庭の娘」であろうことを推測しているが、いわゆる一般的なごく普通の女の子がクルマやスピードにひかれていたのである。

これらの言説で繰り返し語られるのは、内面の空虚さとそれを埋めるためにスピードに熱狂していく若者像である。「彼らは思想なんかなんにも持っていない」（『朝日新聞』昭和四十一年九月十三日）、「ものを考えず、ことばさえ失って、車のキー一つをお守りのように握りしめている」（『朝日新聞』昭和四十一年十一月九日）、「社会的連帯感を全く喪失した失語集団」（『朝日新聞』昭和四十二年七月一日）など、暴走行為の危険性よりも、むしろ彼らが語るべき内面も、語る言葉ももっていない空虚な存在であることが強調されている。内面を語る言葉を持たず、他人とコミュニケーションをはかろうとしない若者像は、まさに「自動車」の芳子と重なる。芳子は九鬼と時間をともに過ごしながらも、全くコミュニケーションをとろうとしないばかりか、彼女が発する言葉はクルマとスピードについてのみである。芳子は極めて現代的な若者像として描出されているのである。

さらに、昭和三十年代後半からのモータリゼーション化において、女性ドライバーの増加も大きな話題の一つとなっている。昭和三十七年の運転免許所持者の約二〇％（一九．七％）が女性で、十六歳以上の運転免許適齢人口のうち、男性は六十一％、女性は十四％が免許を取得している。特に女性の免許所持者の増加率は男性を大きく上回り、逐年増加しており、女性ドライバーの存在は社会の注目を集めていた。(7) ある東京の自動車教習所では生徒の三分の一が女性を占めていたという（『朝日

新聞』昭和三十七年一月七日）。また、モータースポーツにも女性ドライバーは進出し、女子学生自動車連盟の発足、昭和三十八年の第一回日本グランプリには女性レーサーも参加している。[8] 女性にとってクルマは身近なものとなり、女性誌にも女性向けのクルマ購入ガイドや[9]、クルマの購入から運転などについての案内記事が登場する。女性ドライバーについての記事には、未熟な運転技術が「女性特有のクセ」とされたり、運転をすることで男性と共通の話題がふえ、「あなたの魅力がプラスアルファーになります」など、殊更に女性性が強調されている。[10] 運転者の性別に関係なく、移動の自由を獲得することことこそが、女性たちがクルマに関心を寄せた理由だったはずであるが、殊更に女性ドライバーとしての好みが取り上げられたり、女性であることを理由に運転技術の未熟さを卑下するなど、クルマをめぐるジェンダー規範は根強い。

たしかに小説「自動車」もまた注目を集めている女性とクルマの関係を問題としている。しかし、「自動車」の芳子は女性ドライバーをめぐる言説とは別の位相にある。移動の自由を手にすることへの女性たちの挑戦と不安が、これらの言説には感じられるが、芳子は移動の自由などといったことには全く関心をもっていない。クルマを意のままに動かしスピードを体感することに芳子の欲望は向けられているのである。芳子にとってクルマを思いのままに操ることとは、つまりクルマが身体機能の一部として実感されることであり、男性的な能力の増加を意味するクルマの操作性に対する全能感とは微妙に異なる。運転者としてクルマを支配することよりも、クルマが身体の一部として同化することにこそ芳子は惹かれているのである。スピードへの欲望に根ざした機械と身体の接続というどこかサイボーグじみた身体こそが芳子の求めているものではないだろうか。またそれは、芳子の部屋がクルマのポスターやミニ・カーで埋め尽くされていることと繋がる。「人は車に家の再現を期待するのである」[11]とバルトが語り、「動く個室」とよく言われるように、車内という密室はドライバーにとっては非常に親密な空間であり、また、自己の身体の延長でもあるのだ。芳子の場合はまだそのような車内空間を所有してはいないが、彼女の部屋がクルマにまつわるモノに溢れかえっていることは、芳子という存在の反映である。自らの身体とクルマを同化させせスピードを体感することによって、空虚な内面を充填しようとする行為は、「人形一つ、花一つない」がらんとした自分の部屋をスポーツカーグッズで埋め尽くすことと同じである。

芳子のクルマというモノへの所有欲は、ジェンダー的な規範にとらわれないものではあるが、モノを所有するための手段は、自己の女性性を武器としている。芳子は自分の肉体と引き換えに、九鬼からクルマを与えられる。しかし、この二人の間には、強者としての買う男と、弱者としての売る女という関係性は見出せない。芳子は自らの肉体を九鬼に提供することに、些かのためらいもない。むしろ、二人の肉体関係は芳子の誘導によって結ばれようとしているのだ。芳子の欲望はクルマを所有し、スピードを自在に出すことで、クルマというモノと自らの身体を同一化させることである。クルマの購入を約束した九鬼との肉体関係は、自己の身体とクルマが等価で結ばれることにほかならないのである。芳子にとって九鬼は、クルマと彼女の幸福な一体感を媒介する仲介者でしかない。自身の欠落した戦中期の青春を埋め合わせようとした九鬼は、反対に、芳子の欲望の達成に利用されていくこととなる。まるで芳子の

思惑にはまるかのようなかたちで肉体関係を結ぶ成り行きに、九鬼は「不機嫌」にならざるを得ないのだ。

芳子は欲望するモノを所有するためであれば、モノと交換可能なものとして身体を扱っている。そこには、彼女の内面的な葛藤はない。モノの所有のために自らの身体を経済的な価値判断のもとに扱うのである。芳子の欲望の先は、そのようにして手に入れたモノと身体の同一化であり、単独の身体そのものは、非常に意味が希薄なのだ。九鬼によってクルマが買い与えられることに、九鬼のブルジョア意識のあらわれを指摘することもできるが、むしろ芳子は九鬼の経済力を巧みに利用し、欲望の達成を試みようとしているのである。そして、消費をめぐる欲望のありようが、まさに日本の高度成長期を象徴するクルマによって表象されているのだ。

おわりに

芳子の部屋がクルマにまつわるモノで満たされていたように、あるいは、クルマを自在に操りスピードを体感することでクルマと身体の境界線を消滅させようとしていたように、芳子はモノによって自己の存在が根拠づけられている。モノへのフェティッシュな愛は、人間と人間との交渉を、モノの所有をめぐる関係のなかでしかとらえることができない事態を引き起こす。空虚な内面を抱えた芳子という人間の存在は、モノとの関係や、その所有、そしてモノが溢れかえった自閉的な空間によって成り立っている。それは、後の高度大衆消費社会以降に特徴的とされるオタク的な感性の萌芽といえるかもしれない。その点で「自動車」という小説は、高度経済成長期を背景としながらも、その行く先をいち早く見据えた作品として評価されてもよい。クルマが持つ記号性に焦点をあてたことにより、単に高度成長期というポスト戦後の時代を写しとっただけでなく、昭和三十年代の消費と欲望の関係から、一般には八〇年代に顕著となる高度大衆消費社会の予兆をいち早く見出しているのである。

「自動車」に描かれているのは、戦後の高度成長の進展によって生み出された歪みである。モータリゼーション化という時代状況を背景に取り入れ、スピードに熱狂する若者を描きながら、クルマが表象するものが世代によって異なっていることをあらわしている。九鬼にとってクルマとは、父性、男性性の象徴である。そして戦時下という状況のなかで欠落した青春を、戦後からポスト戦後にかけての繁栄によって埋め合わせようとする戦中派の姿が戯画的に描かれている。一方、芳子にとってのクルマとは、スピードを体感させるために身体に同一化させるものである。戦後生まれの若者たちがもてあましている倦怠に満ちた日常から脱出するため、芳子は自己の存在をモノそのものと接続させていく。そのようななかでは、生身の身体は限りなく意味が剥奪された肉体でしかなく、容易にモノと交換されていくのだ。九鬼は他者である芳子と時間を共有することを望むが、そもそも芳子の目には時間を共有するに足る他者の存在は見えていない。芳子は他者を排除し、モノそのものとの関係性のなかからしか自己をとらえることができないのである。しかし、このような事態を芳子は悲観的にとらえていない。むしろ、欲望の充足のために自らすすんで身体とモノを等価にし、交換しているのだ。テクストの結末に描かれている九鬼と芳子の断絶には、戦後の繁栄を積極的

に享受する戦中派的人間と、ポスト戦後を生きる若者の欲望の在り様の相違を象徴しているのではないだろうか。

　また、戦後というパースペクティブからとらえると、戦後社会の終焉とポスト戦後社会の到来という構図がみえてくる。戦後の復興期からの繁栄を享受してきた九鬼は、その身なりや所有しているクルマに象徴されているように、戦後にアメリカと良好に関係を結ぶことで成熟を自己のものとした。しかし、戦後生まれの若者たちに代表される新たな世代は、成熟を回避しつづけ、自閉的な欲望を満たしていく。その方法として、なんらためらうことなく、アメリカに身をまかせるのである。「自動車」というテクストには、クルマが表象するものの世代差を軸にして、戦後から高度成長期であるポスト戦後への時代の変化、さらにはいずれ到来する高度消費社会化への予感があるのだ。

注

(1) 田口憲一「自動車時代の思想」(『中央公論』昭和三十八年六月)では、「自動車が人を轢くとは、どういうことであるか。それは単に人の肉体を轢くことではない。人の〝運命〟を轢くのである」と述べ、自動車は速度をもった「悪徳」であることが論じられている。

(2) ポール・ヴィリリオ「輸送の革命から通信の革命へ」(『電脳世界 最悪のシナリオへの対応』本間邦雄訳、産業図書、平成十年二月)

(3) ジャン・ボードリヤール『消費社会の神話と構造』(今村仁司、塚原史訳、紀伊國屋書店、昭和五十四年十月)

(4) 『昭和三十七年警察白書』のデータによる。

(5) 西本郁子『時間意識の近代―「時は金なり」の社会史』(法政大学出版局、平成十八年十月)

(6) 『女性自身』昭和四十一年十二月号「ドキュメント報告―原宿族狩り!」という記事には、原宿族の女の子たちは「家庭も平凡な中流家庭の娘達が多い」ことや、「男の子は、上流階級の息子が多い。車もほとんど自分名義よ。女の子は車なんかもってないわね」といった声が紹介されている。

(7) 同(注4)

(8) 生内玲子「女性ドライバーの昭和史」(『別冊一億人の昭和史 昭和自動車史』毎日新聞社、昭和五十四年五月)

(9) 吉川嘉治「あなたも自動車が買える」(『婦人公論』昭和三十五年五月)

(10) 生内玲子「連載 マイカー教室」(『婦人公論』昭和四十一年一～六月)

(11) ロラン・バルト「自動車の神話」(『ロラン・バルト著作集4 記号学への夢』塚本昌則訳、みすず書房、平成十七年八月)

テキストは『決定版三島由紀夫全集20』(新潮社、平成十四年七月)を使用し、ルビは省略した。

(なかもと さおり、広島大学大学院博士課程後期在学)